

教職大学院

Newsletter No. 72

福井大学大学院 教育学研究科 教職開発専攻 since2008.4

2015.4.18

附属学園がスタートした

教育地域科学部附属学園 松木 健一

平成 27 年 4 月より教育地域科学部附属学園がスタートした。附属学園は、現在ある 4 つの附属学校園を機能的に統合して、総合的に企画運営を行うとするものである。ここでは附属学園の必要性とその役割について、今日の教員養成改革の動向と絡めて説明したい。

今世紀は、「知識基盤社会」「少子高齢社会」「グローバル社会」「ダイバーシティ社会」「生涯学習社会」「IT ネットワーク社会」等と形容されるが、この世紀を強くたくましく生き抜くための「新しい学力」を子どもたちに培うのが、私たち教育に携わる者の使命である。近年にわかにアクティブラーニング等の学習方法が強調されるようになったが、当然のことであろう。一方、社会の少子化・高齢化に伴い逼迫する財政は、教育に十分な予算措置を行なえない状況になってきている。

このような中で、「新しい学力」を子どもたちに培うためには、「教えの専門家」から「学びの専門家」への教師観の転換が必要条件である。「学び続ける教師像」(中教審答申平成 24 年)を実現すべく、100 万人いる教師(平成 26 年 5 月)の「高度化」「専門職化」を推進しなければならないであろう。また、その一方で教員免許状の授与件数は 20 万件(平成 24 年度)におよび、また、毎年新採用は 2・3 万人であることから、供給過剰状態になっている。今後、子ども数の急激な減少の中で、教員数の削減は避けて通れない課題となるであろう。今世紀の教師教育は、このような教師数の削減と教師の「高度化」「専門職化」を同時進めなければならないという極めて困難な課題に立ち向かわなければならなくなっている。

現在、国立の教員養成系学部大学ではミッションの再定義を受け、新課程の切り離し(教育学部の縮小)と、教

師の「高度化」「専門職化」に向け、教職大学院の拡充が進められている。平成 27 年から 29 年にかけて、全ての教員養成系学部大学に教職大学院が設置されよう。教職大学院の設置が意味するものは、これまでのように教師になるまでの 4 年間でターゲットした学部から、教師の生涯にわたる職能成長を支える機関への転換である。この基軸の変更には、養成・採用・研修の一体化(平成 24 年と中教審答申)が必要であり、教育委員会と大学との連携協働が強く求められるようになってきた所以である。

一方、附属学校に目を転じると、教育学部の縮小は附属学校の縮小に直結した課題でもある。おそらく第 3 期中期目標中期計画中に、附属学校教員 6100 名の削減問題がクローズアップされることになろう。これに備える意味でも、また、日本の教師教育改革の牽引的役割を果たす意味でも、附属学校は果たすべき役割を果たし、粛々と実績を積み重ねていくことである。

少子化時代を前提にした教員養成から教師教育への転換、つまり、学部生教育から教師生活 30 数年を支える教育への転換は、附属学校の研究開発校及び教育実習校としての役割を大きく変化させるであろう。

内容

- 附属学園がスタートした (1)
- 平成 26 年度学位記伝達式が終了しました (3)
- 平成 27 年度開講式が開催されました (3)
- スタッフ紹介 (4)
- 院生紹介 (7)
- イェナプラン研修(オランダ)に参加して (12)
- 検討を要する教育改革に関する文書(16)
- スタッフ一覧 (18)
- シリーズ大学の理念再考(19)
- Schedule (20)

まず、明白なのは教育実習校から教員研修学校への転換である。附属学校は、教育実習のみならず、教師の全てのライフステージに応じた研修が可能となる研修学校に変わらなければならないであろう。サービスマーケティング（学校ボランティア）を受け入れつつ、教育実習に繋げることはもとより、教職大学院生の年間にわたるインターンシップの実施、さらには、現職教員の教職大学院に優先的に入学できる仕組みの構築や管理職研修等が、都道府県の教員研修センターとは違い、子どもを前にして実践的に行える研修学校として整備されなければならない。本学の教職大学院は学校拠点方式を採用しているが、これをさらに徹し、教職大学院の一部を附属学園内に移設した。教職大学院の理念である理論と実践の融合をまさに空間次元でも実現しようとする試みである。

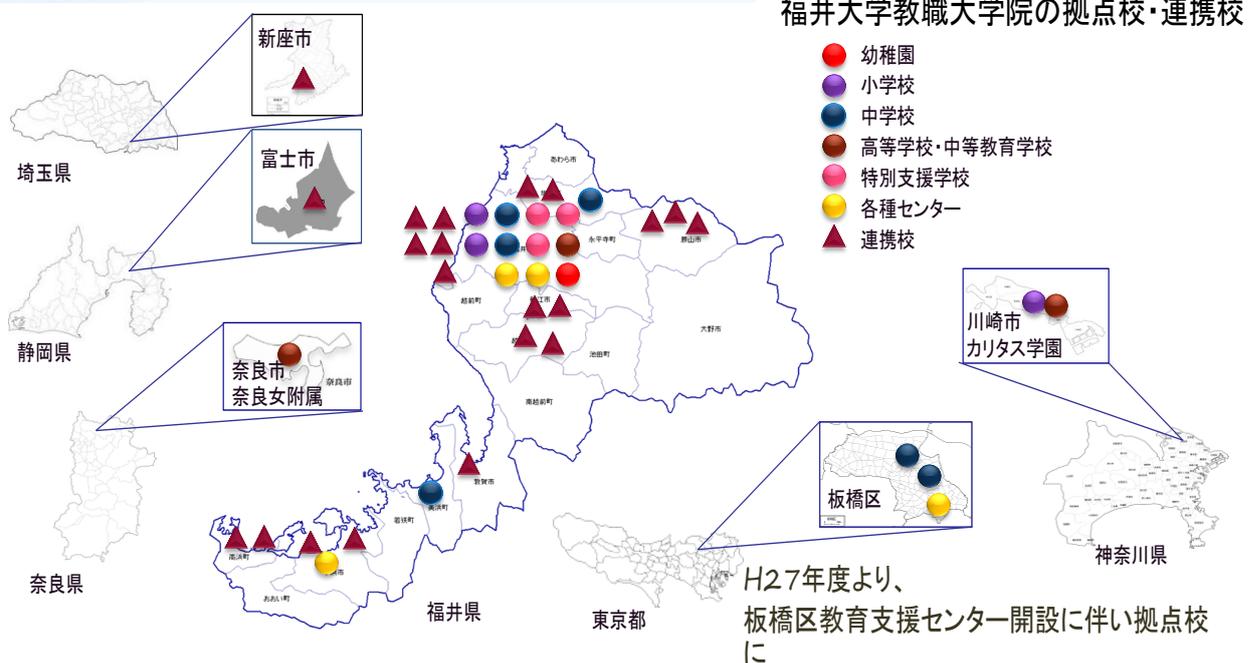
附属学校のもう一つの役割は、研究開発校としての役割である。今後、福井のような地方では、少子化と人口流失により急速に学校の統廃合の問題が噴出してくる。これに対処しつつ、また、この問題を逆手にとって「新しい学力」であるダイバーシティな社会に対応できる能力を育成していくためには、異年齢異能力集団にお

けるPBL（Problem Based Learning）の実現できる学校を造って行くことであろう。附属学園では、小中一貫校の設置を目指していく。校種間を超えた子どもの学びの実現と、教員の校種を超えた学び合う専門職集団の育成を目指していきたい。さらに、小学校教員の幼児教育を体験できる場としての附属幼稚園の機能強化や、特別支援学校の参加によるインクルーシブなクラブ活動の実現等の教育を推進していきたいと考えている。

このようなことを実現するためには、附属4校園の各校の利害を超えた組織が必要であり、そのために附属学園が設置された。しかし、附属学校の企画運営の統合は、一足飛びには成立しない。学校教育法施行規則上の学校は依然として4校存在しており、また、将来を見据えない限り、今まで通り経過していても何の支障もないからである。実際のところ、現実の制度を維持するため、規則が事細かにつくられており、新しいことに挑戦することは、かなりのエネルギーのいる仕事である。変えることが絶対正しいという保証などあるはずもなく、なおのこと揺るぎ無い教育改革への信念が問われることになろう。一歩ずつ着実に歩む以外に道はなく、ウルトラCなどを期待してはならないのだろう。まずは一歩から。

福井大学教職大学院のネットワーク 2015 ① 開校式でのプレゼンより (by 木村優)

「学校拠点方式」によるネットワークの広がり



◆◆ 平成 26 年度 学位記伝達式が終了しました ◆◆



春の訪れが感じられる 2015 年 3 月 23 日、コラボレーションホールにて平成 26 年度学位記伝達式が執り行われました。平成 26 年度はスクールリーダー養成コース 20 名、教職専門性開発コース 15 名、合計 35 名の院生が教職大学院を修了しました。式では、在校生やスタッフらが見守る中、中田隆二研究科長から祝辞と一人一人に学位記が授与されました。

学位記伝達式の後は、M2 の院生にとっては最後となるカンファレンスが行われました。各テーブルでは M2 のみなさんの長期実践報告書執筆の苦労話や来年度に向けた抱負等が語られ、まさに「再出発」の門出となるものでし

た。

最後に、これまで教職大学院を支えてくださっていた巨田尚彦先生と藤井佑介先生のご挨拶がありました。巨田先生は平成 26 年度をもってご退職され、藤井佑介先生は長崎大学大学院教育学研究科（教職大学院）へご転出されます。「春風や鬪志いだきて丘にたつ」高浜虚子のこの句は巨田先生からの贈りものです。

卒業された院生のみなさんに心からのお祝いを申し上げるとともに、今後の益々のご活躍を応援したいと思います。（半原芳子）

◆◆ 平成 27 年度 開講式が開催されました ◆◆



2015 年 4 月 4 日（土）、平成 27 年度の開講式がコラボレーションホールにて執り行われました。今年度は教職専門性開発コースに 8 名、スクールリーダー養成コースに 26 名が入学しました。またこの間新しいスタッフが 9 名加わり、開設 8 年目となる教職大学院に新たな風が吹き込まれています。

開講式では、中田隆二研究科長から「学校の外に出ながら自身の考えを深めてほしい」というエールが送られ、また柳澤昌一専攻長から「全てのメンバーが専門を超えて学校に関わり、新しい学びに挑戦していく」という決意が述べられました。新入生はこれらの激励を受けて、新たな学

びに対する緊張を感じるひと時であったと思われます。つづいて教職大学院のガイダンスが行われ、そして写真撮影の後に、新入生は教員や在校生とともに小グループに分かれて、今年度の展望の共有や今後の連携に関わる調整等を行いました。小グループでは終了時刻を過ぎても語り合う姿が見られ、新入生の緊張もほぐれて、新しい日々への準備も整ったように感じられます。

雨が降ることもなく満開の桜に祝福された日に入学された新入生のみなさん、ご入学おめでとうございます。これからもどうぞよろしくお願ひします。（稲井智義）

スタッフ 紹介



倉見 昇一

2月1日に文部科学省から大学院教育学研究科教職開発専攻(教職大学院)教授として着任しました倉見昇一です。前職の業務の関

係で3月末まで文部科学省と行ったり来たりしていましたが、やっと4月から腰を据えてこちらで勤務することができ、大変嬉しく思っています。どうぞよろしくお願ひいたします。

文部科学省と一口に言っても教育、科学技術、スポーツ、文化とその所掌する分野は広いのですが、私はその中でも初等中等教育に関わる仕事に携わってきました。

例えば前職の部署では、学習指導要領(主に国語科、社会科、家庭科、芸術科関係)に関するマネジメントを担当していましたが、最近では次期学習指導要領改訂に関わって、中央教育審議会への諮問にもある、高等学校の新たな科目等の在り方や地理歴史科の見直しなどについて、どのように議論を進めていったらよいか、議論に必要な材料(資料)は何か、などを内部で検討していました。

また、選挙権年齢が18歳に引き下げられることを旨とした公職選挙法改正案が今通常国会で審議されることを踏まえ、高等学校での政治や選挙に関する学習を充実させるために、総務省と連携して副教材作成のプランを立てたり、学校での政治的中立の確保や生徒の政治的活動の在り方について関係課と調整したり、そしてこれらと野党の会議の場や国会議員に説明したり、国会審議での答弁作成に当たったりということをしていました。国会や政治と言え、外から見ると施策によっては文部科学省が時の政権に傾倒しているように思われることもあるかもしれませんが、事実はかなりいろいろなバランスを取り(考え)ながら事を進めています。

文部科学省というと、「事件は会議室で起きてるんじゃない!現場で起きてるんだ!」のフレーズではありませんが、「現場を知らない」「学校のことを分かっていない」などと批判されることがよくあります。私はそのときに「現場を分かっていないというよりは、現場と同じ立場(感覚)では仕

くらみ しょういち

事をしない」と弁明してきました。あるシステムの中では、それぞれの組織が担うべき(担わなければならない)役割があると思っています。各々が適確に果たすべき仕事をするために、お互いがそれぞれの役割や立場を理解し合えたらよいのではないかと考えています。(文部科学省って意外に柔軟なんですよ)

さて、今回の諮問では、「アクティブ・ラーニング」という言葉にかなりの注目が集まりました。諮問文では、「課題の発見と解決に向けて主体的・協働的に学ぶ学習(いわゆる「アクティブ・ラーニング」)や、そのための指導の方法等を充実させていく必要があります」と書かれていますが、福井大学の教職大学院が“実践-省察-再構成のサイクル”や“理論と実践を融合するプログラム”を掲げ、『教師は指導・伝達・訓練によって鍛え、その教師は、探求・活用力や協働する力を子どもにつけるなどということはありません。』(Newsletter No.57)とあるように、教師の資質能力を高め、これと合致していることは理想的というよりはむしろ当然あるべき姿なのでしょう。

また、福井大学の教職大学院においては、プロのファシリテーターや企業経営者などの直接学校関係者ではないスタッフも複数おられて教員養成に関わっていることは、大変意義深いことと思っています。子どもたちの興味・関心を生かし、自主的、自発的な学習が促されるような授業を展開していくためには、いろいろな角度からのアプローチが大切で、様々な業種や立場の人たちと接したり関わったりすることは、限られた経験の幅を広げるとともに、違った視点で見たり考えたりする機会を得、学校の教員にとって、授業方法や評価方法を見直し改善するきっかけになると思います。同様に私も、教職大学院の先生方や院生の皆さんと協働していく中で研鑽していきたいと思っています。

私は文部科学省のほか、教員研修センターや、大分県臼杵市教育委員会、筑波大学附属久里浜特別支援学校にも管理職として在籍していたことがあります。このように、大半が初等中等教育に関わる仕事に就いていましたので、高等教育

についてはほとんど何も分からず、FDやGPA、ディプロマ・ポリシーなど初めて聞く言葉や、学部や教職大学院のシステム（やり方）を理解するのに戸惑っています。勉強いたしますので、どうぞよろしく願いいたします。

最後に、このところ思っていることを述べて終わります。現在、子どもたちを含め私たちは、かなり便利な環境の中で生活しています。コンビニやスマホ、パソコンはもちろんのこと、例えば車などはそのうちハンドルさえ握らなくても目

的に着くことができるようになるでしょう。このように、考え工夫し、判断しなくてもいい生活環境の中で、子どもたちに思考力や判断力などを育てるとはどういうことなのか、スマホやタブレットを常時携帯できる世の中で、同じ時間に同じ空間で集団で学ぶ学校の意義や役割とは何なのか、突き詰めれば難しい問題だと思いますが、一つのテーマとして考えていきたいと思っています。



隼瀬 悠里

こんにちは。2月1日付で教職大学院の専任教員として着任しました、隼瀬悠里と申します。教育地域科学部発達科学講座との兼任教員です。本来は、「初めまして」のご挨拶の場なのですが、私の場合は本年度で福井大学に勤務し始めて5年目になりますので、「改めてよろしくお願いしま

す」というご挨拶の場に変えさせていただきます。

私と福井大学との縁の始まりは、2010年の秋に遡ります。当時の私は、京都大学大学院教育学研究科の比較教育学研究室に在籍する博士後期課程2年次の大学院生でした。構成員の研究対象とする国も教育段階も様々で、唯一、教師教育を研究対象としていた当時の私は、自身の研究が机上の空論でしかないのではないかと、その意義について大変もどかしい思いをしておりました。そんなある日、研究室OB経由で「福井大学教職大学院で、海外の教師教育を研究している人を探している」という話を受けました。恥ずかしながら、その当時は福井大学教職大学院の取り組みもよく知らず、福井という県についても隣県に住みながらほとんど知らなかったのですが、直感的に「この機会は、私にとって何か突破口にな

はやせ ゆり

るかもしれない」と思い、すぐに指導教員の元へ相談に向かいました。

このような経緯があり、2011年から福井大学教職大学院で特命助教としてお世話になることになりました。勤務するなかで、実際の学校現場に向かわせていただき、また院生の皆さんが実践のなかで教師としての専門性を高めていく過程に立ち合わせていただき、これまで自身が取り組んできた研究について見つめ直すことができました。自分に何が出来るのか、と悩んだ日々も多々ありましたが、「多様な教員がいるというのが意義なのだから、率直に自分が感じたことを言えればいい」「私たちも共に学んでいるのだから、そもそも何かしてあげようという姿勢はおこがましいのだ」という同僚の言葉に励まされてきました。2013年からはこれまで教育学を担当されていた教員が異動されたこともあり、一旦教職大学院から離れ、学部の教員養成に尽力することとなりました。

紙幅の都合上、具体的に私が関わらせていただいた仕事について述べることは出来ませんでした。養成から研修まで教師教育全体に携わらせていただくなかで、私自身も実践者として学ばせていただく貴重な機会を得ています。これからも、皆さんから大いに学ばせてください。どうぞよろしくお願いいたします。



山崎 智子

2月1日付で教職大学院に着任いたしました山崎智子と申します。1月までは、福井大学の高等教育推進センターという部署に所属し、主に全学教員のFD（ファカルティ・ディベロップメントの略、大学教員の授業内容や授業方

やまざき ともこ

法の改善に関する組織的な取り組みを促すこと)を担当してきました。その関係で毎週教職大学院の全スタッフが行っているFD研究会に参加させていただくようになり、ラウンドテーブル等にも関わらせていただくようになりました。

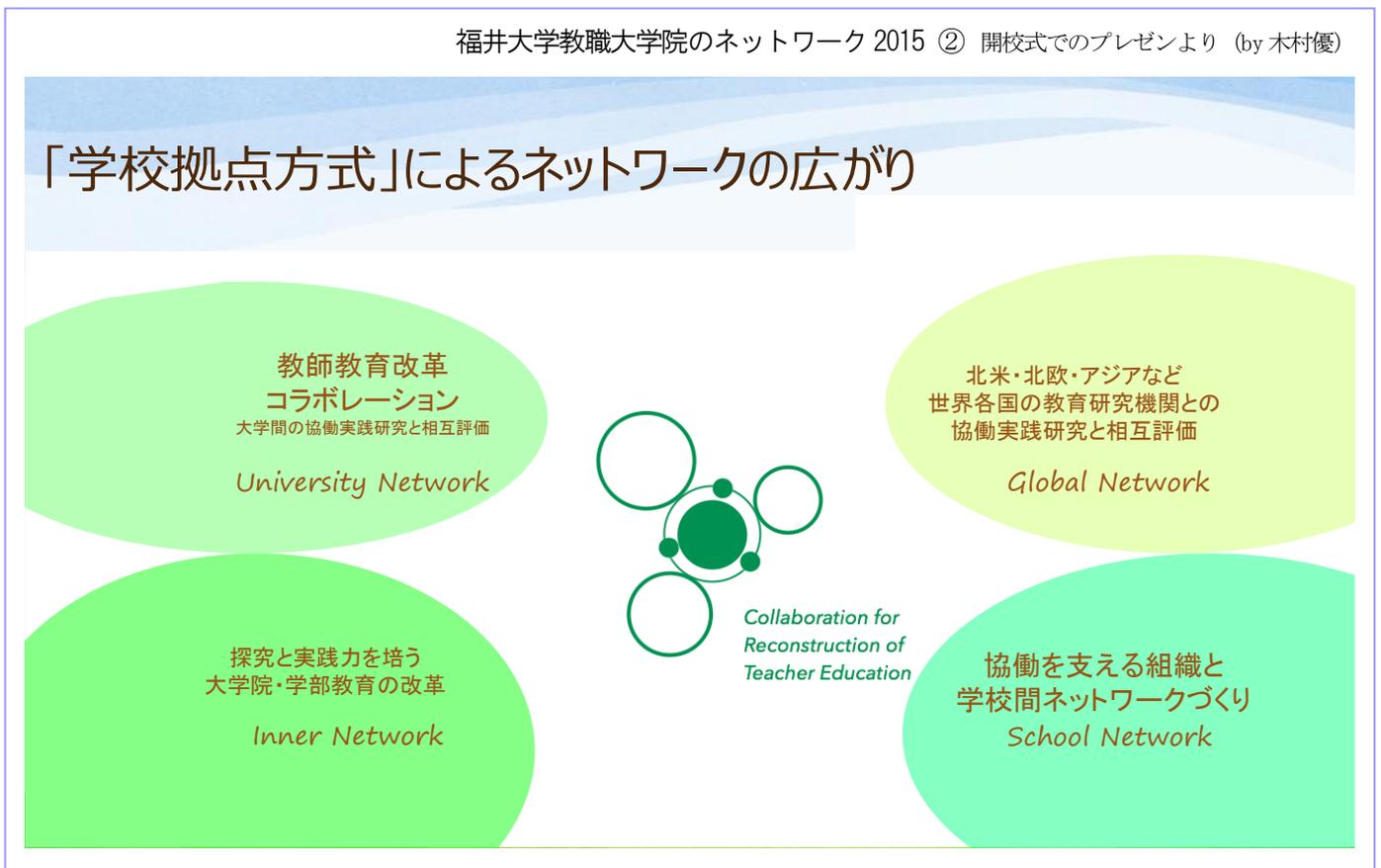
教職大学院に関わるようになって、教師教育における大学の役割に関心を持ち始めました。もともとの研究テーマがイギリス大学制度史であり、大学における専門職養成の歴史についても研究対象としてきましたので、自分の中では自然な

流れであったように思います。現在、「学校拠点 (“school-based”）」での教員養成は、多くの国々で実施されています。共通しているのは、これまでの大学における座学中心の教員養成プログラムでは修了生が現場に出て教師として働く際に役に立たないという、従来の大学教育への不信感が背景にあるということです。しかし、福井大学の教職大学院を近くで見えてきて感じることは、学校での学びをベースにしながら「理論」と「実践」の往還を目指すことを考えた場合に、教師教育における大学の役割は否定されるものではなく、学校や教育行政（教育委員会）との連携のなかで捉え直され、むしろ強化されるべきものではないかということです。加えて、大学と学校と教育委員会が連携しながら教員養成—採用—研修を一体となつて行うことの重要性和、それができる福井ならではの強みを実感しています。

新たな形の教師教育をより確かなものにするためには、FDの場が非常に重要であるということも感じています。つまり、専門分野が多様なそれぞれのスタッフがチームとなつて働く際に、お互いがどのような理念や背景を持って教育に携わっているのかについて共有し、尊重し合うことは欠かせないということです。この点については、大学だけではなく、学校現場にも相通じるものがあるのではないかと考えています。

こうした自分なりの実感、そしてこれまでの教職大学院との関わりの中で生まれてきた様々な問いを、これからスタッフとして働いていくなかで、一つ一つ掘り下げて考えていきたいと思っております。皆さんとともに学べることをとても楽しみにしております。どうぞよろしく願いいたします。

福井大学教職大学院のネットワーク 2015 ② 開校式でのプレゼンより (by 木村優)



院生 紹介



藤田 芳幸 ふじた よしゆき

この度、福井大学教職大学院教職開発専攻教職専門性開発コースに入学しました、藤田芳幸と申します。出身は京都府で、滋賀大学教育学部を卒業しました。大学では、部活動、体育会、学生自治会、スクールサポーターなどの自身の経験になるようなことを進んでやってまいりました。四月からは、中藤小学校にてインターンシップをさせていただきます。

大学では、地域学習を中心に学んでまいりました。地域に根差した教育の実践を読む機会多く、子どもの出発点である地域を学ぶことの大切さを学びました。またボランティア活動で、一年間半の間、スクールサポーターもさせていただきました。スクールサポートの中で子どもに安心される教師の姿を模索してきました。子どもがどのような安心を求め、クラスがどういった安心を求めているのかを見極めようとする試行錯誤の日々でした。子ども一人ひとりと深く関わり、子どもにとっての「安心」について考えさせられた、大きな糧を得た一年間半でした。また、公開研究会などに参加させていただく機会も多く、様々な先生の姿を拝見させていただきました。どの先生からも学ぶこと

は多く、インターンシップにおいてもさらに学んでいきたいです。教育実習では、小中高の全ての課程で授業をさせていただくことができました。教壇に立つ度に思うことは、「この一時間を有意義なモノにするか、無駄な時間にするかは自分次第」ということです。有意義な授業を多くできるように、さらに大学院、インターンシップを通して研鑽していきたいと思います。

私が教職を目指そうと思った理由は、大きく二つあります。一つは、「伝える」ことの面白さを高校の授業で感じた経験があるからです。話し合うことの楽しさ、面白さ、そして大切さを子どもにも感じてもらいたいです。そしてもう一つ、決定付けたのは社会を変えることができるのは教育であると考えたからです。社会を変えるというのは、人を変えるということ。人を変えるという責任は尽きないですが、社会を良い方向に向かわせる一因に成れればと思います。

これから大学院の二年間は、人との繋がりを大切にしていきたいです。人との出会いは、相手を変え、自身も変えます。その変化が良いものであるために、自己研鑽に努め、相手との対話を大切に、互いの考えを伝い合い、ためになる時間を作れば良いなと思います。どうぞよろしくお願い致します。



松山 琴美 まつやま ことみ

はじめまして！今年度、教職専門性開発コースに入学した松山琴美です。専門教科は社会科です。出身大学である京都教育大学では、社会科教育や持続可能な開発のための教育（ESD）を中心に学んできました。

教育実習では、附属小学校で4週間、附属中学校で2週間させていただきましたが、指導案作成で忙しく、生徒と関

わる時間もなかなかとることができなかったこと、県外にいたため福井県の公立学校の現状を知らないことなどから、大学卒業後にいきなり現場に入ることに大きな不安がありました。そんな折、福井大学の教職大学院の存在を知りました。実践力など様々なスキルを身に付けるだけでなく、しっかりと振り返り、様々な立場の人と意見交換ができる場がある本校の教職大学院への進学を決意しました。

4月からは至民中学校でインターンシップをさせていただいています。至民中学校では異学年でのクラスター活動

に力を入れており、私が京都教育大学在学中に授業の一環などで訪問した公立学校にはない仕組みです。自分の経験のない異学年の生徒と授業で関わるなど新しいことを学んでいく機会に恵まれたと思うので、その機会を逃さず、現場の先生方や生徒たち、先輩や地域の方々から多くのことを吸収していきたくと考えています。また、私は中・高・大と吹奏楽部に所属していました。辛いことがたくさんあり辞めたいときが多々ありましたが、継続したことによって得た忍耐力や人間関係はその後の私にとって大きな財産となりました。その経験を生かして、微力ですが部活動を通して継続することの大切さを生徒たちに感じてもら

えるようお手伝いができたらと考えています。

分からないことは多いですが、「何事もおそれず挑戦してみる」をモットーに先生方に教えていただきながら試行錯誤して、自分の糧にしていきたいと思っています。また、教科でも学年ごとの生徒の発達を理解し、どのような言葉の選択が効果的な学びに繋がるのか、生徒が主体的に学習をするためにはどういった教師の支援が必要なのかといったことを考え、実践していくことで教科の専門性も高めていきたいと考えています。最後になりますが、このような学びの場を用意していただけることに感謝し、精一杯精進していきますので、2年間よろしくお祈りします。



池田 文明 いけだ たけあき

はじめまして。教職専門性開発コースに入学させて頂きました池田文明です。小学校免許取得のため、これから3年間お世話になります。どうぞ宜しくお願い致します。

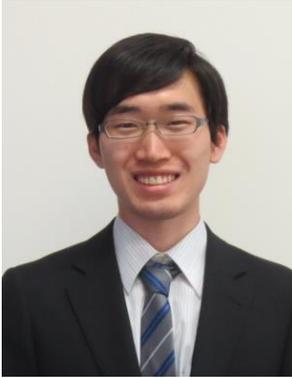
私は福岡県柳川市で小中高を過ごし、その頃から漠然と「将来、学校の先生になりたい」と考えておりました。高校卒業後に関東に上京し、神奈川大学にて入江直子教授の指導により、教育に関する多くのことを学びました。そして2009年3月に中国語及び英語の中学・高校の教員免許を取得し卒業致しました。以降東京にて、番組制作（主にバラエティ番組）に従事しておりました。しかし今年に入り、「先生になりたい！」というかねてからの想いが遂に爆発し、約6年間勤めた会社を辞め本校を受験するに至りました。

改めてこの6年間を思い返すと、私はある1つのことを学んだ気がしております。それは、「笑い＆ユーモア」が人と人を繋げる大事な役割を担っているということです。笑うことは、世界中の誰もがもつ生理現象で、他人と自分を「感覚」で同調させることができる唯一無二のツールです。例えばチャップリンの無声映画は、文化や言語の

壁を乗り越え、世界中で愛されました。そのような観点から、先生と生徒という異なる環境で育った人と人との「笑い」によって連結し、強固な信頼関係を構築できると考えております。その上で適した指導を実践すれば、今までの以上のモチベーション向上や成果が望めるのではないかと考えております。

「低賃金・長時間労働」「非正規雇用の常態化」「加速するグローバル化」など、常に変化し高度化する厳しい現代社会の壁が、子どもたちの目の前に否応無く迫っております。短いですが私の社会人経験から、その人がその人らしく生き抜くために必要なものは、「相談が出来る相手」と「確固たる夢」であると考えております。だからこそ子どもたちが「相談が出来る相手」に私自身になり、「確固たる夢」の助力になりえるような指導法を、「笑い＆ユーモア」を用いた実践の中で、大いに体得していく所存です。

教育に関する知識がまだまだ乏しい私ですが、これから大学院や学校現場の先生方、同期のみんな、そして目の前に座る子どもたちと協働して実践を重ねる中で、多くのことを習得し将来の糧にしたいと考えております。つたない文章になってしまいましたが、最後までお読み頂き誠にありがとうございます。これから御指導・御鞭撻の程、何卒宜しくお願い致します。



山田 晃大 やまだ あきひろ

はじめまして。この春から、教職大学院の教職専門性開発コースに入学した山田晃大と申します。それまでは信州大学理学部の数理・自然情報科学科(現在の数学科)で4年間、生まれ育った福井の地を離れて学んでおりました。

教員免許は数学の一種免許を中学・高校共に取得しております。

信州大学の学生だった頃は、大きく分けて3つの取り組みをしてまいりました。1つ目は、自主ゼミや幾何学の研究室などでの数学の研究です。その努力が実り、卒業時には優秀賞を頂くことができました。この経験を生かして、生徒たちに数学の面白さや奥深さを伝えると共に、「真実を見抜く力」を育む指導を行っていきたいと考えております。2つ目は、個別指導学習塾での講師や、信州大学の他学部1年生を対象とした大学数学の学習相談、母校での教育実習などの、教育に関する取り組みです。様々な場で、数学を教えたり生徒達と触れ合ったりといった経験をしましたが、どの場面でも、もっと沢山の経験を積みたく

いう気持ちになりました。3つ目は、大学祭の実行委員長としてチームを支え、導く活動です。この活動で私は、チームで協同して活動することの大切さとチームへのリーダーとしてのかかわり方を学びました。これら全ての経験が、私のこれからの教育活動に生きてくると考えております。

教職大学院では、多くの現場経験とそれを受けての学びによって、生徒の「生きる力」を育てていける、確かな指導力を身につけていくと共に、教員の仕事について学んでいきたいと考えております。これからの時代を生き抜くためには、型にはまらない様々な能力が必要です。例えば、問題解決能力や論理的思考力、人間関係形成能力などがそれにあたります。生徒自身のそれらの能力を育てていくにはどのような指導を行っていけばよいのか、まだあまり知りません。また教員の仕事が生徒と直接かかわることだけでは無いことも、なんとなくではありますが知っております。現場での実践を通して、自分は教員として何ができて、どうなりたのかについて考え、学んでいきたいです。まだまだ知識も経験も浅い私ですが、良い教員になりたいという気持ちだけは、誰よりも強く持っているつもりです。これからどうぞ、よろしくお願いたします。



山田 芳裕 やまだ よしひろ

はじめまして。今年度、教職大学院教職性専門コースに入学した山田芳裕です。福井県大野市出身です。3月まで金沢学院大学スポーツ健康学部在籍しておりました。4月からは福井市中藤小学校で長期インターンシップをさせていただきます。また、教育職員免許取得プログラムを履修することとなったため、3年間、こちらの教職大学院にお世話になります。専門教科は保健体育で、主に陸上競技(中長距離)とスキーを専門競技としております。

学部時代では、主にスポーツ心理学を学び、「子どもの体育嫌い」に関する卒業論文を執筆致しました。執筆に至った経緯としては、4年時に行った教育実習での、ある経験が基盤となっています。授業の中で、運動に消極的な感情を抱いている生徒に対して、適切な声掛けを行うことが出来ませんでした。授業全体の流れを重要視してしまった

挙句、運動に積極的な生徒を半ば優先的に扱ってしまい、消極的な生徒に十分な指導・声掛けが出来なかったという経験があります。このような経験を踏まえ、運動に消極的な感情を示す子ども達に、どうすれば体育を好きになってもらえるのか?と、自問自答した日々が思い出されます。そこで、この長期インターンシップで、子ども達と共にこの課題に対しての考えを深めていきたいと考えています。子ども一人ひとりをしっかりと見つめ、個性を尊重した声掛け・支援等を行っていこうと思っています。

私が教員を志した理由としては、大きく2つあります。1つは「体育の素晴らしさを伝えたい」という事です。「体育」は人間性の向上や物の捉え方・表現方法など、人格形成に欠かすことの出来ない教科だと考えています。自分自身も大きく成長させてもらったという経験から、現代を生きる子ども達に、少しでも体育の素晴らしさを伝えることが出来たら良いと考えています。2つ目は「故郷への恩返し」です。私が生まれ育った福井県大野市は、自然豊かで人間味溢れるとても素敵な町です。このような恵まれた環境の中で、伸び伸びと勉学やスポーツに励むことが出来た

ことに感謝しています。そういったことから、指導して下さいました先生方、家族、地域の人々に恩返しをしたいと考えようになりました。

今後、長期インターンシップを通して、様々な出会いがあると思います。この教職大学院での「縁」に感謝し、自

らの能力を高めていきたいです。そして、今日まで私を育ててくれた福井県に恩返しできるように、努力を重ねていきたいと思っております。どうぞこれからよろしく願います。



増谷 淳 ますや じゅん

今年度から教職大学院教職専門性開発コースでお世話になります増谷淳です。富山大学を卒業後、生まれ育った福井県に戻ってまいりました。大学での専攻は小学校教育が主で、教科では英語を専門としています。

教育活動において私が重視しているのは「子ども理解」です。授業や生徒指導は当然重要ですが、それらは教師が子どものことを深く理解し、互いに信頼関係を築いた上でこそ成り立つものだと考えています。

それを踏まえ、子どものことを表面上で判断せず、子どもの本質を理解できる教師を私自身の理想像として掲げています。そのきっかけは小学校での教育実習でした。学級でも1,2を争う活発な子がいました。授業の時間になっても席に着かなかったり、乱暴な言動が目立ったりしたため、私は頭ごなしにその子を叱っていたように思います。のちに、担当の先生に児童の表面上の行動だけでなく、様々な視点で見守ってみよう助言をいただきました。すると、困っている友だちに積極的に声をかけたり、苦手な教科でも粘り強く取り組もうとしたりしている場面に出

会いました。この時、微かながらその子の本当の姿を理解できたように思います。表面上では活発でやんちゃな子だと認識してしまっていたのですが、実は友だち思いで熱心な面もある子なのだと私自身の考えが変わりました。

それ以来、子どもと触れ合う際には、目に見える行動だけで子どものことを判断せず、子どもの言動1つ1つに対して「なぜそうした行動をとったのだろうか」と考えるようにしています。そうすることで、子どもの言動には表れないような本当の思いまで汲み取ることができるよう努めています。それこそが信頼関係を築く上で最も重要なことなのではないでしょうか。

今後は、主に教師が学級の子どもたちをどのように理解していくのか、そしてどのように信頼関係を築いていくのかという過程に着目したいです。先生方が1年間を通して学級をまとめる過程を見ることができるのは、1年間の長期インターンシップならではだと考えられます。教師が施す日々の声かけや支援を学びながら、私自身の「子ども理解」についてもより深めていきたいです。これから出会う子どもたちとはもちろん、お世話になる先生方、先輩や同期の皆様との関わりを大切にしながら、日々精進していきます。至らない点が多いかと思いますが、どうぞよろしく願います。



長谷川 久里子 はせがわ くりこ

はじめまして。今年度、教職専門性開発コースに入学しました長谷川久里子と申します。

大学では、生きていくために欠かすことのできない「食」について深く勉強したいと考え、東京家政大学で栄養学を専攻しました。教職課程を履修し、中高の家庭科と栄養教諭の免許を取得しました。そして4月より、附属小学校

にてインターンに入らせていただくこととなりました。

私が教員を目指そうと思ったきっかけは、高校の家庭科の授業で、先生の食に関する知識の豊富さに驚き、憧れたからです。

大学の教育実習では、家庭科で高校に3週間、栄養教諭で小学校に5日間お世話になりました。実習では、先生方の授業、子どもへの指導の様子を間近に見させていただき、自分にはまだまだ力が足りないと感じました。小学校では、短い期間でしたが、ほぼ1日中子どもたちと関わることができました。子どもたちは、私が授業で話したこ

とをよく覚えてくれていて、知識の獲得に大きな影響を与えることに責任とやりがいを感じ、「子ども一人ひとりと向き合う時間を多く持ちたい」と考えるようになったため、小学校教員免許も取得したいと思うようになりました。ちょうどその時に、教職大学院に今年度から新たに小学校教員免許取得プログラムが設けられるという話を耳にし、より実践的で専門的な知識を学ぶことができる福井大学教職大学院へ是非とも入学したいと思いました。

私は、自分に自信を持つ、持てるということが子どもにとってとても大切だと考えています。なぜなら、自分に自信を持つことができれば、どんな困難や逆境にも立ち向かうことができると思うからです。子どもが自分に自信を持

てるように指導ができる教員になりたいと思っています。しかし、現段階では具体的にどのような支援、指導をしたら良いかはまだよくわかりません。よって大学院でのカンファレンスやインターンシップの中で、自分なりに答えを見つけていきたいと思っています。

大学院の先生方や先輩方、附属小学校の先生方、同期の皆様、子どもたちとたくさんの方から学ばせていただく大学院生活になると思います。貴重な機会を与えていただいていることに感謝し、1日1日を大切に、教員としての力を日々高められるように精進します。

3年間、どうぞよろしく願いいたします。



串 尚哉 くし なおや

初めまして。今年度から教育学研究科教職開発専攻教職専門性開発コースに入学した串尚哉と言います。出身は京都府で大学進学の際に福井大学教育地域科学部学校教育課程臨床教育科学コースに進学し、今年で福井県は5年目に

なります。学部4年間で経験した出来事はそれまでに経験したことのないことの連続であり、出会った人々は個性的で見習うべきことがとても多い人達でした。中でも森透先生や松木健一先生との出会いは本大学院に進学するきっかけでした。年齢、所属、立場の異なる様々な人に出会い関わることで4年前の自分よりも少しは良い人間に変わることができたのではないかと感じています。これから大学院で学ぶ2年間においても人との出会いを大切に、多くの事を学んでいこうと思います。また、私と関わってくださった人に少しでも有意義な何かを提供することができたら良いなとも思っています。

学部時代に関わっていた子どもから言われて印象に残

っている言葉があります。「なんで勉強しなあかんのや」です。その時私は高校や大学の事を話しながら「勉強は将来必要だからしないとイケないんだ」ということを伝え、その子も一応納得したように見えました。ただ、よく考えてみれば高校受験や大学受験という過程を通らない子ども、もしくは重視していない子どもにとっては私の説明は到底納得できるものではありませんでした。ですがそのほかに納得させられそうな理由を持っていません。それは私自身が高校受験、大学受験を経てきた身であり、年を重ねるごとにそれらを当然のものであると考えるようになっていたからです。

私は子どもが楽しく学校生活を送りつつも将来自分の進路を選択するときに学力不足で希望の進路を諦めてしまわないようにしたいと思い教員を志すようになりました。この思いは今でも持ち続けていますが同時に学力(教科の知識)だけではない「何か」も必要なのではないかと考えています。未だその「何か」は分かりませんが大学院で少しでもそれらしいものを見つけ、子どもたちに伝えていける教員になりたいと思っています。

イエナプラン研修（オランダ）に参加して

福井大学教職大学院 小林 真由美

年度末の大変忙しい中、大学には大変な迷惑をかけながら、3月22日から28日までオランダで開催された「イエナプラン教育」に関する研修に出させていただいた。イエナプランはドイツのペーター・ペーターゼンが始めた学校教育で、子どもたちは異年齢のグループでクラス編制される。クラスはファミリー・グループと呼ばれ、担任の先生は「グループ・リーダー」に過ぎない。学校は子どもと保護者と教員の共同体であり、いっしょに学び、いっしょにつくっていくというのが基本の考え方である。

現地のスキポール空港に集合して開始されたこの研修。集まってくる19人はどんな人たちなのだろうと興味津々。ほとんどが20代から30代の若者たちである。しかしながら、私より上の人ももちろんいて、教員、大学生、企業のコンサルタント、大学教授と仕事も様々だ。この企画を主催したリヒテルズ直子さんはセングの「学習する学校」の訳者で、オランダから日本にイエナプランを発信している。研修所はずいぶん田舎で、オランダのイメージ通りのかわいなお家を改造したものだ。まず驚いたのは、若者たちのやる気満々な姿。オランダの200校のイエナプラン校に個人でメールしてすでに3校を視察してきたという20歳の大学生。大学院生ながらすでに自分の人生を3冊の本にまとめて出版し、印税で食べているという26歳の若者。日本にイエナプランの学校を作るのだという29歳の女の子。スウェーデンに留学中でその間にオランダまで足を伸ばした学生。そのエネルギーが素晴らしくて圧倒される。参加者の中で、英語が話せないのは私一人・・・。

3月23日（月）研修開始。まずはイエナプラン校の校長先生だったというヒューバットさんから説明を受けながら「メモではなくマインドマップを作っていきましょう」と言われる。既存の知識と新しいものをつなぐこと、新しい創造性を磨く、視覚的に自分の知識を処理していく、付随する問題を発見する、フォーカスをとらえるなど、その効能を言われて簡単な書き方説明とともに作成する。すでにイエナプランについて熟知しているからか、若いみんなの美しいマップに感心する。イエナプランの学校での活動は、会話・遊び・仕事(学習)・催しという4つの基本活動を循環的に行う。時間割は教科別で作られず、4つの活動の交替をもとにして作られる。7つの価値（行動を起こす・企画する・協働する・結果を出す・表現する・省察す

る・責任を持つ）は教職大学院が大事にしているものと大差はない。個を大事にし一人一人の能力を最大限に発揮させるということが、集団づくりを大事にする日本との違いかもしれない。イメージとしては総合を考えていたが、教科の学びにも活用されており、教師のねらいもちゃんと提示される。学校には自立学習と協同学習の2種類があり、自立学習では子どもたちは1週間単位として、どんなものを使って、どの時間にどうやって学びを形成するかを自分で企画する。やらせっぱなしでなく先生もちゃんとチェックしながら、どの子がどこまでトライしどのような成果をあげているのかを、常に評価している。

午後からはグループになって「日本の学校でイエナプランの授業をする」という想定でワークショップを行った。私のグループでは「イエナプランの学校の新入生勧誘のCMづくり」というまるで附属中の学Pのような内容を企画し、10週分の授業内容100時間を構成してみた。1時間の間に授業内容の構想を考え、プレゼンする方法まで企画する。他のグループでは「校舎の中にワクワクルームを作ろう」など楽しい企画が紹介された。その実現に向かうには様々な問題や課題が生じる。「問題こそが学びのチャンス」と教職大学院でもよく耳にした言葉が繰り返された。

翌日の24日は学校視察。イエナプランの小学校に朝から出かける。統廃合の関係で1つの学校に児童クラブや児童相談所、そしてイエナプラン以外の学校4校が一緒になっている。体育館などは共有しており、ドア一つの仕切り

	dinsdag	woensdag	donderdag	vrijdag
rekenen	maken 39	maken 40	maken 41	maken 42
lezen	5,7-biz 12	lezen 13	lezen 14	
werkboek			maken 7	
lesboek	lezen 7-8	lezen 9-10	lezen 12+12	
letter	2biz	2biz	2biz	2biz
zetter	4.10 4.11	4.12 4.13	4.14 4.15	
ABC taal	vrije tekst	vrije tekst	vrije tekst	vrije tekst
reken tuin	tekening	typen	stempelen	werkblad
ambra				
schrijfhoek				
BLOON	dinsdag			
woorden	woorddicte			
maken				
letters				
flitsen				



で違う学校になる。自立学習の時間で、子どもたちは自分で今日のプログラムを作成し、コピー機やパソコンを駆使しながら自分の課題に取り組んでいる。やりたように勝手にやっているわけではない。枠組みは作られていてそれを選択していく仕組みである。どの子も学びに対して前向きで自立的である。私が日本人だと分かって、パソコンで翻訳しつつ自己紹介してくれた。オープンスペースを生かした廊下は、出会いの場となっており、パソコンや椅子や机が用意されている。全体的に内装の色が華やかで明るい雰囲気に含まれる。壁には「個人指導のリクエスト用紙」が貼られていた。上級生が教科と時間を提示し、そこに下級生は希望を書き込む。「算数を 10:10~10:40」の欄にかわいい女の子が自分の名前を記入した。「ブロックアワー」と呼ばれる協同学習も参観した。一人の女の子の日記をみんなで校正する。輪になって 20 人程度が、それぞれで意見を出し合い、修正が加えられていく。スクリーンの日記はタイトルから、みんなで練り合う。修正の決定権は先生ではなく執筆者の女の子である。彼女がみんなを指名し、意見を取り入れるかどうか判断する。

大休みにグラウンドで遊ぶ姿は、日本の小学生と変わらないように見えたが、異学年、異性との関わりが多い。会話・遊び・仕事(学習)・催しという 4 つの基本活動の中の遊びも大事な学びの場である。砂場で小さな女の子を抱き上げた上級生は、穴の中に入りきれない彼女のために、穴を掘り始め、その連鎖が広がって、男の子 3 人、女の子 2 人で大きな穴に完成させた。最後に小さな彼女を抱え、その中にすっぽり入れて完成を喜び合った。

一方で砂を掛け合っていた男女は、互いの頭に砂をかけてちょっと険悪な雰囲気。しかし、女の子が自分の頭に砂をかけると、それが妙に楽しかったのか、お互いに自分の頭に砂をかけ始め、二人で声をあげて笑いあった。全体的に遊びに加わることができない子どもがいない。みな、自分の思い思いに大休みを謳歌して次の授業に戻っていつ

た。

午後からは協同学習で、KIBA と呼ばれるいじめ防止プログラムを参観した。国語の時間のように輪になって座った彼らは、椅子を使って「いじめる子」「いじめられる子」「傍観者」さらには「いじめに加勢する子」そして「助ける子」を表現する。「いじめる子」は椅子を高く積み上げて、その権威を表現し、我関せずの「傍観者」は背もたれのない丸椅子で自分の意思がないことを表す。椅子の種類や向きにも意味があり、子どもたちのここまでの学びの過程が伺われる。「助ける子」を演じてみると、「いじめを止める子」だけでは足りない。もう一人の「いじめられた子を守る子」の 2 人は必要であると言う結論に至って授業が終わった。まさに体験して学ぶアクティブラーニングである。

授業全般に渡って、先生は何が正解かを示さないのとして子どもたちの学びは間違っただけの場合もある。先に示した女の子は、リクエストして上級生から算数を習ったにもかかわらず、 $0.5m=5000cm=500dm$ と教えられる。 $1m=100cm$ 、 $2m=200cm$ と書きながらその間の $1.5m$ もなぜか $15000cm$ 。女の子も分かっていないが、上級生も小数点は理解していないらしい。それでいいのだろうか。ヨーロッパの個人主義は私にはどうも納得できない部分もあり、自分の好きなようにプログラムを組むことがどこか塾の個別学習と似た感じに見えてならなかったが、子どもたちの瞳は輝いており、先生方も自分達の学校に誇りを持っていた。「日本の子どもたちは、学校が楽しいのですか」と聞かれれば「楽しくない子がたくさんいます」と答えねばならない今の現状にはなんの言い訳もできない気がした。

リヒテルズ直子さんとの話の中で「個を知るといことは集団がつながってこそ」と言われ、プリントと個人で格闘していた姿だけで個人主義と判断した自分の見取りの甘さを反省した。「校長は学級づくりを学校でやるのよ」「学校で大事なものは仕事・遊び・催し・そして互いの語り合いの 4 つ。この 4 つを校長も先生もみんないっしょにやるの。」とイエナプランの基本活動を明確に示され、そう





例えば私の憧れるようなすてきな校長先生は日本でも、みなこの4つを大事にしていると納得した。

25日(水)イエナプラン協会のフレイクさんから、研修を受ける。サークルに座った私たちの前に一枚の瓦らしきものが登場。一人一人手に持って回していく。「これは何だと思いますか」とは聞かず「これについてどう思いますか」と問われる。「どうって・・・」戸惑う私たちに彼は上手に答えを引き出していく。「今、表と裏を見ましたね。なぜ見たのですか」「重い！っていいましたね。何キロぐらいありますか」「じゃ次の人は何キロぐらいだと思いますか」「え？あなたは今何をしたんですか」・・・特に多くは語らない。決して私たちの意見を評価しない。しかし、絶妙なつながりで、私たちの学びは深くなっていく。「この瓦の向きはこれに違いない。」「この模様は雪のストッパーじゃないか」「いやいや、次の瓦との連結部分だよ」「こっちが塗装が濃いから表だろう」「この記号は製造の番号かな」19人の意見が積み重なってスタートの意見より、ずいぶん科学的な学びが深まる。途中で外を眺めた一人を見逃さず「今、あなたは何を見たんですか」「外の瓦をみてどうなっているかなあと」「どうなっていますか」・・・と一人一人の発見を上手に学びとして紡いでいく。「この瓦について説明すれば実は・・・で話は3分で済む。でもみなさんは45分も考えた。この時間は無駄でしょうか。互いの話を聞き、自分なりの思考を深めました。それは瓦を知ることよりもっと大事なこともかもしれない。さらに、きっと明日から皆さんは瓦を目にしたときまたさらに考えることでしょう。」と探究学習の大切さを実感した。しかし私はむしろ、彼の絶妙なつながりに「教師の見えない支援」の難しさを感じ、「なるほど、私もやってみよう」という若い先生たちに彼の支援の仕方は見えたのだろうかと少し不安になった。「子どもというペンを握らず、下に落とすのではなく、手の上にペンをのせてそれを支えること」という彼の名言が心に響いた。

午後からはイエナプランについて学んでいる現場の先

生方からの実践報告を聞いた。10数人の先生方がそれぞれの取組を紹介した。オランダの7000の学校の、イエナプランを行っているのは200校で、それぞれの取り組みも様々である。しかし、彼らに迷いはなく、子どもたちに責任を持たせて信頼して任せるという理念は、一貫している。そして誰もが自分の学校を誇りに思っていた。

26日(木)イエナプランの鍵となる7つの流れを説明。フレイクさんの英語はオランダ人の英語なので少し聞きやすく、私にとっては英語学習の場にもなっていた。①刺激する。好奇心を湧かせる②問いを集める③役割分担する④報告の準備⑤省察を支援する⑥次に向けて保管する⑦カリキュラムマネジメント。講義の間にも、DVDを見せ、アイスブレイクを入れ、ティータイムを取り、私たちを全く飽きさせない研修の腕にも感心する。久しぶりの雨の外を眺めて「みなさん、一人が一つずつ雨に関する問いをたててください」「だけど先生方が答えを知っている問いじゃなく、あなたが本当に知りたいと思ったこと」参加者の生物の先生は「なんでも知っちゃってるから問いなんて浮かばない」とこぼす。それが枠を越せない大人の堅さかも・・・「雨粒の最も大きいのはどのくらい?」「降水量と個人の性格の相関関係は?」「雨の音ってどう表現する?」こんなにバラエティに富んだ20もの問いをどうやってまとめるのかと思案したが、彼は全くまとめようとしない。それぞれに対し「どうやってやろうか?」「あなたなら何ができる?」「なぜそんなこと考えたの」と温かく受け止め、さらに調べてみたくなるように温かく促す。『答えを出すのではなく問いを出すこと』というキーワードは私にとってなんとも魅力的な一言であった。問いを更なる問いにしていくのである。ストーリーラインアプローチという楽しいワークショップも体験した。「9歳のシャイで鳥の好きなフローリス」という設定で「フローリスの姿」「フローリスの2人の友達」「フローリスの家族」「フローリスの家」「フローリスの部屋」をグループで考え好きなように表現する。グループの個性的なエピソードを発表し合い、



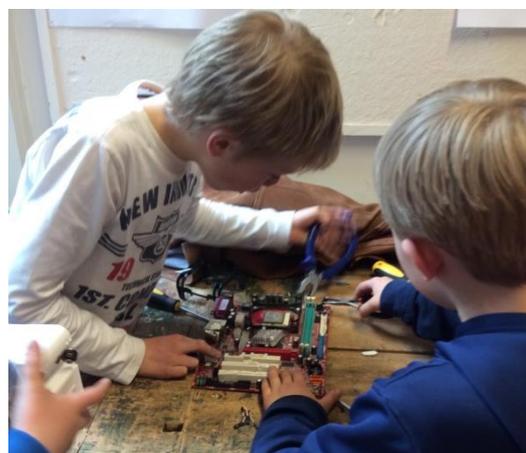
私たち全員のフローリスストーリーができる。私たちは夢中になって自分のグループのストーリーをたてた。この活動には2つの狙いがある。「クラスにいる引っ込み思案な男の子に勇気を与える」「みんなで鳥について学ぶ」現実に近いが現実ではない第3者のストーリーをみんなで考えていくことで、客観的にそして主体的にみんなが自分のこととして捉え、あたかもフローリスになったように鳥について調べることができるという。

午後からはあつという間の研修期間の修了式である。とはいえ、日本のセレモニーとは全く違い、またグループに課題が提示される。「研修全体」「1日目」「2日目」・・・というくじを引き、それを「人形劇」「パントマイム」「オペラ」「歌」「ショットスクリーン」で表現する。すてきなシアターに案内されそこでグループ発表を行いながら、自然と私たちはこの一週間を振り返った。催しと省察である。

最終日は、もう一つの小学校に視察に出かけた。ここまでに学んだイエナプランのおかげで、私自身の見取りも深くなり、目指すものが見えてきた気がする。案内は子どもたちがすべて英語でしてくれる。この学校での一番の驚きは保護者との一体感。保護者は9時までは毎日、学校にいてよい。私たちへのランチも保護者が作ってくれた。行事があれば必ずいっしょに手伝いに来る。保護者に聞いてみると口をそろえて「この学校はほんとうにすばらしい」と絶賛する。「この学校にいると子どもたちは自ら自分で考えたいという子になる」と教師と保護者が同じように答える。学校はまさに、子どもと先生とそして保護者との共

同体である。ここまでで学んできたことを、現実のものとして確認し一週間の研修を終えた。

日本でこのままの学校を再現することは難しい。しかし、今、教育に求められていることはやはり世界のどこでも、自分で「生きる力」であることを再認識した。日本で最も近い形は「総合」だと思うが、学力調査でちょっと成績が下がったからと、早速にその時間を削った日本に、それで良かったのかと問いたくなる。イエナプランの学校では、小学校の間にこうした自分で解決する力を養っているの、中学高校で、イエナプラン以外の学校に行き、講義形式の授業であっても、自分で学ぼうとする姿勢が身につけているとのこと。日本でももう一度その理念に沿って、総合を見直してはどうだろうか。総合が訳もわからず時間つぶしになっている学校は相変わらずたくさんある。小学校の総合で養った「生きる力」を、中学、高校で生かせる子どもにするには、小中高の連携と理念の共有が必要である。イエナプランからやり方や技を学ぶのではなく、この理念をなんとか広められないものか。「学校組織の中で先生方にその理念の共有を図りたいのですが」と言った私に「私が訳した『学習する学校』を読んでみて」と直子さんから宿題を課せられた。いっしょにいた若者と読破して語り合うことを約束して、私の一週間は終わりを告げた。帰りの飛行機では、くたくたの体でも気持ちだけははりきっていて、私にとって教職大学院の最後の一年となる新年度に思いをはせながら、オランダの子どもたちの輝く目を思い出していた。



検討を要する教育改革に関する文書 2015年4月

教育改革の全体像にむけて

- 01 中央教育審議会
子供の発達や学習者の意欲・能力等に応じた柔軟かつ効果的な教育システムの構築について（答申）2014年12月22日
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/_icsFiles/afieldfile/2014/12/22/1354193_1_1_1.pdf
- 02 中央教育審議会
これからの学校教育を担う教職員やチームとしての学校の在り方について（諮問）2014年7月29日
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1350537.htm
- 03 中央教育審議会教育振興計画部会 教育振興基本計画 2013年6月14日
http://www.mext.go.jp/a_menu/keikaku/detail/1336379.htm
- 04 内閣府教育再生実行会議
04-06 「学び続ける」社会、全員参加型社会、地方創生を実現する教育の在り方について（第六次提言）2015年3月4日
http://www.kantei.go.jp/jp/singi/kyouikusaisei/pdf/dai6_1.pdf
04-05 今後の学制等の在り方について（第五次提言）2014年7月3日
http://www.kantei.go.jp/jp/singi/kyouikusaisei/pdf/dai5_1.pdf
04-04 高等学校教育と大学教育との接続・大学入学者選抜の在り方について（第四次提言）2013年10月31日
http://www.kantei.go.jp/jp/singi/kyouikusaisei/pdf/dai4_1.pdf
04-03 これからの大学教育等の在り方について（第三次提言）2013年5月28日
http://www.kantei.go.jp/jp/singi/kyouikusaisei/pdf/dai3_1.pdf
04-02 教育委員会制度等の在り方について（第二次提言）2013年4月15日
http://www.kantei.go.jp/jp/singi/kyouikusaisei/pdf/dai2_1.pdf
04-01 いじめの問題等への対応について（第一次提言）2013年2月26日
http://www.kantei.go.jp/jp/singi/kyouikusaisei/pdf/dai1_1.pdf
- 04 福井県教育委員会 福井県学力向上センター『明日への学び』第18号 2015年1月21日
加速する教育改革 ～次期指導要領改訂の方向性と大学入試改革の動向～

教育課程における学習の転換

- 05 中央教育審議会
初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について（諮問） 2014年11月20日
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1353440.htm
- 06 中央教育審議会
道徳に係る教育課程の改善等について（答申）2014年10月21日
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/_icsFiles/afieldfile/2014/10/21/1352890_1.pdf
- 07 中央教育審議会
第6期中央教育審議会生涯学習分科会における議論の整理 2013年1月
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo2/toushin/1325214.htm
- 08 中央教育審議会
幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について（答申）平成20年1月17日
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/_icsFiles/afieldfile/2009/05/12/1216828_1.pdf
- 09 中央教育審議会
今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について（答申）2011年1月31日
http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2011/02/01/1301878_1_1.pdf

コミュニケーション・言語活動の充実

- 10 文部科学省 コミュニケーション教育推進会議
子どもたちのコミュニケーション能力を育むために
～「話し合う・創る・表現する」ワークショップへの取組～（審議経過とりまとめ）2011年8月29日
http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/23/08/_icsFiles/afieldfile/2011/08/30/1310607_2.pdf
- 11 文部科学省初等中等教育課程科教育課程企画室 言語活動の充実に関する指導事例集 2011年10月
- 11-01 小学校版 教育出版株式会社 ¥680
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/gengo/1301088.htm
- 11-02 中学校版 教育出版株式会社 ¥605
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/gengo/1306108.htm
- 11-03 高等学校版 教育出版株式会社 ¥1,620
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/gengo/1322283.htm

教育目標・評価の在り方

12 文部科学省 調査研究協力者会議等（初等中等教育）☆☆

育成すべき資質・能力を踏まえた教育目標・内容と評価の在り方に関する検討会-論点整理-について 2014年3月31日
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/095/houkoku/1346321.htm

子どもたちの成長・発達を支える

13 中央教育審議会

今後の青少年の体験活動の推進について（答申）2013年1月21日

http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2013/04/03/1330231_01.pdf

14 中央教育審議会 初等中等教育分科会 特別支援教育の在り方に関する特別委員会 ☆☆

共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進（報告）2012年7月23日
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/044/houkoku/1321667.htm

15 文部科学省 暴力行為のない学校づくり研究会 暴力行為のない学校づくりについて（報告書）2011年7月

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/079/houkoku/1310369.htm

16 文部科学省 生徒指導に関する教員研修の在り方研究会 生徒指導に関する教員研修の在り方について（報告書）2011年6月

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/080/houkoku/1310110.htm

17 文部科学省

生徒指導提要 平成22年 教育図書（2011）¥298

http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/22/04/1294538.htm

教師の専門性と力量形成

18 文部科学省 初等中等教育局教職員課・高等教育局大学振興課教員養成企画室

大学院段階の教員養成の改革と充実等について（報告）

2013年10月15日

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/093/houkoku/attach/1340445.htm

19 中央教育審議会 ☆☆☆

教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について（答申）2012年8月28日

http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2012/08/30/1325094_1.pdf

20 福井県教育委員会 教員研修の在り方検討会 教員研修の在り方検討会報告書 2012年3月

http://www.pref.fukui.lg.jp/doc/gakukyousei/arikatakento_d/fil/002.pdf

21 アンディ・ハーグリーブス（木村優 篠原岳司 秋田喜代美訳）『知識社会の学校と教師』金子書房, 2015.2.

22 佐藤学『専門家として教師を育てる』岩波書店, 2015.3.

高大接続・入試改革・高校改革・大学改革

23 中央教育審議会

新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体改革について ～すべての若者が夢や目標を芽吹かせ、未来に花開かせるために～ 2014年12月22日

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/_icsFiles/afieldfile/2015/01/14/1354191.pdf

24 中央教育審議会

初等中等教育分科会高等学校教育部会審議まとめ～高校教育の質の確保・向上に向けて～ 2014年6月30日

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/047/houkoku/1349737.htm

25 中央教育審議会

新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～（答申）2012年8月28日

http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2012/10/04/1325048_1.pdf

http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2012/10/04/1325048_2.pdf

26 国立教育政策研究所 2013年度教育改革国際シンポジウム TUNING-AHELO コンピテンス枠組の共有と水準規定によるグローバル質保証

http://www.nier.go.jp/06_jigyousymposium/i_sympo25/#reference

27 岸本喜久雄ほか OECD-AHELO フィービリティ・スタディ -第2フェーズの実施を終えて--我が国における実施の経験から得られたこと-

http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2013/07/16/1337623_02.pdf

拠点校・連携校の協働研究、カンファレンス・集中講座を支える多様なメンバー

綾城初穂	臨床心理学
青木美恵	授業改革マネジメント／附属小学校
天方和也	授業改革マネジメント／附属特別支援学校
荒瀬克己	教育行政マネジメント（大谷大学）
石井恭子	理科教育・授業改革マネジメント（玉川大学）
稲井智義	教育思想史
風間寛司	数学教育・教員研修組織化
加藤正弘	コミュニティとしての学校と教師の力量形成
岸野麻衣	幼児教育
木村優	教育学
倉見昇一	教師教育学
小嵐恵子	コミュニティとしての学校と教師の力量形成・障害児教育
小林真由美	カリキュラム・授業改革
小林和雄	理科教育・授業改革マネジメント
笹原未来	特別支援教育
篠原岳司	教育行政学（北海道大学）
杉山晋平	多文化共生教育
鈴木寛	教育行政マネジメント（東京大学・慶應義塾大学）
玉木洋	コミュニティとしての学校と教師の力量形成（福井キャンノン事務機株式会社）
寺岡英男	教育方法学（福井大学副学長）
富永良史	コミュニティとしての学校と教師の力量形成
中川美津恵	コミュニティとしての学校と教師の力量形成
永谷彰啓	コミュニティとしての学校と教師の力量形成
西川満	コミュニティとしての学校と教師の力量形成
二宮秀夫	コミュニティとしての学校と教師の力量形成
隼瀬悠里	教師教育学
半原芳子	言語教育学
松井富美恵	障害児教育・教師教育
松木健一	教育臨床心理学
松田通彦	教育行政マネジメント
三田村彰	教育行政マネジメント
宮下哲	授業改革マネジメント
森田史生	授業改革マネジメント／附属中学校
森透	教育実践史
柳沢昌一	社会教育学
山崎智子	教師教育学

上記以外にも、多数の皆さんに教職大学院の取り組みに協力いただいています。

大学の理念

探究のコミュニティとしての大学

シリーズ 大学の理念再考①

M.アイゲン,H.G.ガダマー,J.ハーバーマス他(赤兎弘也訳)『大学の理念』,玉川大学出版部,1993.

M.Eigen, H.G.Gadamer, J.Habermas, W.Lepenes, H.Lubbe, K.M.Meyer-Abich, Die Idee der Universitat, 1988.

「大学の理念」という論文名で、ヤスパースの同名の著作を想起される方も少なくないだろう。1923年、第一次世界大戦後の状況で表されたこの著書は、1945年、再びの敗戦の後改めて出版され、1961年にさらに新訂版が刊行されている。「大学の理念を自らの内に持つものだけが大学のために問題に即して考え、活動できる。」この言葉、あるいはその「理念」を、現代の大学の状況にあって私たちはどうとらえるべきなのだろうか。

1988年、ハイデルベルク大学において行われた「大学の理念」をめぐる6人の研究者による連続講演は、このヤスパースの著作とその問いへの30年を経た時代における応答という性格を持っている。1960年代末、世界的に広がった大学への懐疑と批判、その後繰り返される内と外からの大学改革の展開、そしてユニバーサル段階に向けて否応なく拡大し変貌し続けている大学の中にある、大学の求めるべきあり方(理念)をどのように見定めていくべきなのか。1980年代半ば、この連続講演が行われた時期には、現在に至る大学の現状と問題はすでに現実のものとなっている。そうした現実の中にある、大学の現実と歴史を踏まえあえて「大学の理念」を語るとすれば、それはどのような意味と可能性を持つのか。ガダマーに始まり、ハーバーマスによって締めくくられるこの論集は、そうした挑戦に応えようとするものとなっている。

ここでは、この連続講演の最後に登壇したハーバーマスの議論に触れておこう。「大学の理念—学習プロセス」(Die Idee der Universitat—Lernprozess)と題するこの論稿の中で、ハーバーマスはヤスパースを基点に、シェルスキーやパーソンズらの大学論、リンガーらの19世紀末から20世紀初頭のドイツの大学と官僚制をめぐる研究、そして自身の1960年代末の立論も含む、それ以後の大学論の稜線を辿り、「大学の理念」の凋落とその必然性を追った上で、改めて近代の大学の出発点における一群の大学論に立ち返る。19世紀初頭のプロイセン改革期の大学論、ベルリン大学の構想とかかわって展開されたフィヒテ、シュライエルマッハ、シェリング、フンボルトの大学論(その背景にあるカントの大学論)は、19世紀末から20世紀初頭に「孤独と自由」に象徴されるフンボルト理念として、当時の拡大する大学に対して人文学的な防御の盾のように持ち出される大学のイメージとは大きく隔たっている。ハーバーマスは、近代の大学論の出発点となる諸論に立ち返りながら、「孤独と自由」という矮小化されたイメージに囚われることなくその初期の構想群に改めて光を当てている。その中でハーバーマスは、シュライエルマッハのおよそ次のよ

うな言葉を引いている。「学的な認識の努力は、何よりもまずその知を伝え合うことに向けられている。認識が、言葉なしに生み出し得ないということが、そうした本質を明確に物語っている。そうであるならば、そうした認識への衝動から、その目的に適った、その実現に必要なすべての結びつき、さまざまな種類の意志の共有、活動の共同体が、形成されていくに違いない。」ハーバーマスは、community of investigation(探究のコミュニティ)という言葉でそれをとらえ返し、「この考えをいささかの感傷も交えずに支持する」と述べている。近代の大学の出発点にあり、現代において「大学の理念」を問い返すときに基軸となる概念としてハーバーマスはこの提起を選択している。

ハーバーマスの1986年のこうした「大学の理念」の再把握は、彼自身の社会理論、公共性・民主制をめぐる学的企図を背景としている。『公共性の構造転換』(1962)、『認識と関心』(1968)、そして1981年の『コミュニケーション的行為の理論』、その後の『事実性と妥当性』(1992)を通じて、ハーバーマスは、一貫して民主制の基軸となる省察的なコミュニケーションによる秩序の形成、その正統性と可能性、そして歴史的な展開をめぐる問いを進めている。

その問いの脈絡とここでの「大学の理念」の再把握は直接結びついている。community of investigationという言葉も、そして「学習プロセス」という副題もまた、開かれたコミュニケーション、Publicな学習プロセスへの企図との関連を意識して選択されているといえるだろう。狭い意味での研究・学究に止まらず、より広い探究と学習のプロセスをも含むコミュニティに、ここでの「大学の理念」をめぐる問いはひらかれている。学的コミュニケーションの共同体としての大学が、それがより広い社会全体の、探究とコミュニケーションを通じた社会形成の可能性の震源地となり、開かれた基盤となり、そしてその省察と批判の錘としての役割を発展的に果たし続けることへの展望へ、ハーバーマスの把握はつながっている。(柳沢昌一)

※この論文は、ハーバーマスの下記の論文集に再録されている。Jurgen Habermas, Eine Art Schadensabwicklung, Suhrkamp, 1987.

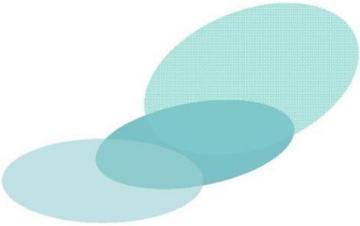
(この紹介文は、福井大学高等教育推進センターNewsletter 第1号 2010.7に掲載されたものである。)

実践し
省察する
コミュニティ

*Fukui Round Tables:
Summer Sessions
For Reflective Practice
And Organizational Learning
In University of Fukui*

For Communities of Practice and Reflection since 2001

2015.6.26-6.28
実践研究 福井ラウンドテーブル
2015 summer sessions



Schedule

- 4/18 Sat - 4/19 Sun 合同カンファレンス 4/25 Sat - 4/26 Sun 合同カンファレンス（予備日）
5/16 Sat 合同カンファレンス オープンキャンパス・大学院説明会（予定）
5/23 Sat 合同カンファレンス（予備日）

【編集後記】

新たな出会いと別れの季節を迎えました。修了された院生の皆様や退職されたスタッフの方々のご活躍を心より祈念いたしますとともに、ラウンドテーブル等での後の実践の展開についてお聴きできるのを楽しみにしております。

4月には新たなスタッフ、院生を多数迎え、教職大学院はまた新たなスタートをきりました。新たな出会いによってもたらされる個々の学びを、今年度もNewsletterによってつなぎ、深め、広げていきたいと思っております。今年度もどうぞよろしく願い致します。（笹原未来）

教職大学院 Newsletter **No.72**

2015.4.18 内報版発行
2015.5.16 公開版発行

編集・発行・印刷
福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻
教職大学院 Newsletter 編集委員会
〒910-8507 福井市文京 3-9-1
dpdtfukui@yahoo.co.jp